

<教育活動事例> 多言語コミュニケーションセンター 一・事始め : 2008-2010年度

著者名(日)	藤田 知子
雑誌名	国際社会研究
巻	2
ページ	217-231
発行年	2011-12
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000557/

教育活動事例

多言語コミュニケーションセンター・事始め — 2008 – 2010 年度 —

藤田 知子*

Educational Activities

KUIS Multilingual Communication Center : The Commencement

FUJITA Tomoko

1. はじめに

神田外語大学は、1987年に外国語学部として創設された単科大学である¹⁾。開学時は2号館までしかなかった本学に、7号館が創設されて2年半になる。3つのレベルからなるこの施設は開学20周年記念事業として構想された。本稿では2階の「多言語コミュニケーションセンター」(Multilingual Communication Center、愛称MULC マルク)の設立とその後の活動を、教員の立場から記録するとともに今後の方向を展望しておきたい。

* 神田外語大学国際言語文化学科教授。Professor, Department of International Language and Culture, Kanda University of International Studies.

1) 本学の沿革、施設等については <http://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/> 参照。

2. 「多言語コミュニケーションセンター」の概要

「多言語コミュニケーションセンター」(以下「マルク」と略記)は、英語の自律学習支援施設 SALC「サルク」とペアになって、海外に旅し留学する感覚を味わいながら言語と文化を学ぶユニークな空間である。専攻がある中国語、スペイン語、韓国語、タイ語、インドネシア語、ベトナム語、ブラジル・ポルトガル語の7つのエリアにはそれぞれの生活文化を代表する街なみや建物が造形されている。各エリアには語学教育の専門資格をもつネイティブの専任講師が常駐し、学生のサポートに当たっている。また、ある言語圏に生まれた子供が青少年になる過程で接するさまざまな書籍や視聴覚ソフトも備わっている。絵本、童話、図鑑、読み物、百科事典、辞書、各国事情、料理、スポーツ、日本のマンガや物語の各国語訳、それぞれの言語で書かれた日本事情や日本語教科書、さらに歌、音楽、映画、語学教材のCD、DVD、CD-ROMなどがある²⁾。LANが完備され、各国の衛星テレビやラジオの視聴、インターネットの利用が可能である。7言語以外にフランス語、アラビア語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語、留学生のための日本語に開かれたインターナショナル・エリアも作られ、学生のための多言語・多文化環境を創り出している。

各言語文化圏の日常の言語と生活文化への扉として、マルクは外国語の習得に社会的・歴史的・文化的な視点を加え³⁾、日本にしながら世界を知る力

2) マルクの多言語教材ソフトの基本コンセプトは英語で多読を実践している水野(監)(2010)、酒井(2002)等から刺激を受けている。初修言語の学生は子供ではないが、学習言語について大人のリテラシーはもっていない。外国語学習において初級から中・上級への橋渡しとなるような、学生にとってアクセスしやすく、手にとること自体が楽しいビジュアル系の書籍を中心に選び、図書館の蔵書との差別化を図っている。

3) 学力と感性はしばしば連動する。マルクの教材ソフトは単に語学書に限定せず、社会的・歴史

を持つ人材の育成を目指している。

3. MULC 設立の経緯

本学には 2003 年に開設された英語の自律学習支援施設サクラ（SACLA）がある。1 階がメディア教育センター（MEC）、2 階が ELI ラウンジと SALC である。ELI の教員組織、および、SALC のラーニング・アドバイザーシステムは先進的な英語教育の試みとして定評があり、2003 年に第 1 回文科省「特色ある大学教育支援プログラム」に採択されている。

他方、学科・専攻がある 7 つの地域言語は、それまで CLI（中国語）、SLI（スペイン語）、ハングルバン（韓国語）などの談話空間をもっていた。だが運営は各言語ごとに行われ、相互の交流もなかった。また、SALC では英語以外の言語にも目配りがあり、教材ソフトも配備されていたが、多言語で展開するには無理があった。

そこで 2004 年前期に SACLA 館の使用状況に関する学生へのアンケート調査を行った。319 名の学生から回答を得た。英語については予想どおり満足度が高い。だが英語以外の言語については英語との不公平感を感じている学生が多かった。教員も同じ意見であった。そこで結果を答申にまとめ学長に提出した。

その後、理事会が創立 20 周年記念事業として 7 号館・新図書館センターの建設を決定し、教員への意見聴取が行われた。そこでかねてからの希望である英語以外の言語の自律学習支援センターといくつかの教室を備えたフロア

的視点を加味し、教養教育との連動を図っている。人道支援、ボランティア活動、国連、環境問題、芸術、宗教など、さまざまな側面から、世界への関心を引き出すような教材ソフトを揃えたい。新旧とりまぜることも大切で、最新の物だけに偏らない配慮も必要である。

を作ってほしい旨、要望を出した。2005年秋のことである。提案は受け入れられた⁴⁾。

2006年に入り、7号館の設計デザイン担当者と各言語の教員が議論を重ね計画が練られた。夏休みには建築関係者と教員が中国、韓国、スペイン、ベトナム、タイ、インドネシア、ブラジルに赴き調査した。極力、現地の建築素材を用い、現地の職人が手作業で建てたものを分解して輸送し、大学で再度組み立てた。家具、道具、衣装、楽器、テーブルクロスに至るまですべて現地で購入した。こうした徹底した本物志向の精神は、本学が新白河に保有する英国研修村ブリティッシュ・ヒルズの基本コンセプトとも通底している⁵⁾。それはすでに本学の伝統ともなっており、本学なりの、異文化への敬意の表し方と言えるのではないか。このように、マルクは、本学の貴重な財産である英語のSALCとブリティッシュ・ヒルズの、多言語・多文化への発展形として構想されたのである⁶⁾。

4. MULCの誕生

4.1 試行期間：2008年10月～2009年3月

2008年9月に7号館が完成し、9月11日に学内関係者へのお披露目が行われた。教員として期待と不安が相半ばする想いで足を踏み入れたとたん、こ

4) 選択外国語科目運営小委員会答申「学生のSACLA館使用状況に関するアンケート報告(英語以外/英語)」(2004年9月)、および、藤田(2006, p.531-532)参照。

5) ブリティッシュ・ヒルズについては<http://www.british-hills.co.jp/>参照。

6) マルクの建築造形について、教員は多言語教育運営小委員会を窓口として意見を述べる機会を与えられた。だが、最終的な判断は言うまでもなく理事会によるものである。紆余曲折はあったが、計画から3年弱で7号館は完成した。小さいが個性豊かな本学の志を具現した事業と言えよう。

れまでに見たことがないゴージャスな建築造形に圧倒された。一体、これは大学の施設と呼ぶべきであろうか。既成概念を完全に打ち破った建築にうれしいというよりも、当惑したというのが正直な感想だった。

まもなく後期の授業が始まり 1 階の図書館が開館した。マルクは完成が遅れ、11 月 4 日ようやく学内オープンにこぎつけた。開館時間は平日の 9 時～17 時 30 分、土日閉館。教材ソフトはまだなく、各エリアに常駐予定のネイティブの教員も揃っていなかった。すでに学期の大半が経過し、学生の行動パターンも定まっている。マルクを訪れる学生はごく少数であった。それまで至近距離にあった談話空間と比べて遠すぎる、ここで一体何ができるのかわからない、5 つの教室も狭くて使いにくい、こんなに豪華でなくてよい、といった声が学生からも聞かれた。

そうしたなかで各エリアは少しずつ活動を始めた。とくに印象に残っているのはスペイン語エリアが開いたクリスマスパーティである。空間はアンダルシア地方の世界遺産都市コルトバの民家にみられるパティオ（中庭）を再現している。ネイティブの教員が中心となってスペイン語で賛美歌を歌い、クリスマスのお菓子を食べ、クリスマスをどう過ごすか等のお話を聴き、クリスマスの映画を鑑賞した。まるでスペインにいてクリスマスを過ごしているかのような幸福感が漂っていた。マルクの疑似留学空間としての魅力をはじめて実感した瞬間だった。こうして試行期間としての 2008 年度が終わった。

4.2 2009 年度 成果と課題

2009 年度の新入生から、入学と同時にマルクがある世代となった。まず新入生全員にメディアオリエンテーションを実施し、マルクの利用を呼びかけた。各言語も、さっそく新入生歓迎会や留学生との交流会を開いた。昼休みを中心に、学生がさかんにマルクを訪れるようになった。学生がマルクを使いだしたのだ。開館時間も 9 時 30 分～18 時に延長された。

5月9日には、外部の教育関係者と建築関係者を招いて7号館オープンハウスを執り行い、学外への正式なお披露目を果たした。

マルクのような教育施設は、何よりもまず、ネイティブ教員や留学生との談話と交流が魅力である。4月からは7言語すべての語学専任講師がフルタイムで赴任した。彼らは語学教育の専門資格をもつネイティブスピーカーである。学生たちは語学専任講師や留学生を囲んで、活発にコミュニケーションをするようになった。教室での授業は同じ学年の学生が一緒であることが多いが、マルクができてからは学年を越えた縦のつながりが広がったという。

各言語のスピーチコンテストの指導や練習も各エリアで行われるようになった。授業中に出てきた疑問点を先生に質問したり、授業で習った表現をすぐに使おうとやってくる学生も多くなった。もちろん、エリア内のテーブルで自習したり、DVDを観たり、インターネットで調べものをしたり、遊んだりという利用も増えた。

各エリアでのイベントも活発に行われるようになった。留学生の歓送迎会、クリスマス(スペイン、ブラジル)やお正月(韓国)などの年中行事、韓国の海苔巻き講習会、ブラジル・コーラスサークル発表会、スペイン映画の上映会などである。学事部主催の「学長と語ろう」も開催された。

通路を利用して「世界の絵はがき展」と「世界のクリスマス・カード展」も行った。各言語の絵はがきやカードに教員や学生がコメントを書いて通路に展示した。この絵はがきは後述する文科省補助金によるe-Learningコンテンツの作成にも一役買うことになる。

このように、2009年度はマルクの実質上の初年度として、各エリアの活動が盛んになり、マルクの基盤を築いた一年となった。教材ソフトの設置も進んだ。民族衣装、楽器、ゲーム、人形、ちょうちん、テーブルクロス等の文化的小物が空間を飾り、想像していた以上に生活感をかもしだした。とくに学生が民族衣装を着たり、楽器をつまびいたり、ゲームをしたり、小物を使

って遊ぶようになると、疑似留学空間としての特徴が際立つ。マルクに活気を与えるのはやはり学生なのである。

4.3 2010 年度 成果と課題

マルクは各言語エリアの活動に支えられている。だが、各エリアが個別的・並列的に活動するだけでは真の意味での「多言語」とは言えない。建築としてのマルクの最大のオリジナリティは、7つの疑似留学空間がワンフロアに結集した点にある。こうしたハードの強みを、マルクの理念と活動内容の練り上げに結びつけ、活かしていくことが重要である。それは、マルクという場を与えられた教員にとって、楽しみであると同時に、義務と言えよう。

縦割りになりがちな言語と言語の間に関係性を作りだし、分断しがちな語学と教養の学びを融合し、「多言語・多文化間コミュニケーション」を生み出す場としての役割を果たしたい。そうした想いを抱きながら、2010年度は以下のような試みをおこなった。

4.3.1 多言語棚の設置

マルクは8つの空間に仕切られている。そのうち中国、韓国、インドネシア・エリアの門や塀は本物志向のため強固で、他の空間とのつながりを分断しがちになる。教材ソフトは各エリアとも一番奥にあり、常連の利用者は別として、手に取りにくい位置にある。対応策として「多言語棚」をこしらえ、ブラジル、スペイン、インターナショナル・エリアの前の通路に置いてもらった。複数の言語のDVDや書籍が開架で並んでいるため、学生は各エリアに入らなくても手にとることができる。オープンキャンパスなどで受験生がマルクを訪れると、多言語棚にならぶジブリの各国語版DVDや日本マンガの翻訳、多言語の絵本などを興味深げに眺める姿が見られるようになった。

4.3.2 マルク映画鑑賞会

隣接するクリスタルホールで無料の学内向け映画鑑賞会を始めた。年4回の「本編」と各言語が自由に開く「番外編」がある。上映の前後に言語や内容に詳しい教員が必ず解説を加えており、教室での授業を拡大した教育活動といえる。ここでは紙数の都合上、初回(5月25日)に取り上げた日本映画『フラガール』(季相日監督、2006年)を中心に紹介しよう。

この作品は常磐ハワイアンセンター(現・スパリゾートハワイアンズ)の立ち上げという実話に基づく作品で、DVDには英語字幕が付いている。日本語音声に英語字幕を付けて鑑賞し、土田宏成准教授(日本近代史)が『フラガール』の歴史的背景)、柴原智幸専任講師(英日通訳・翻訳)が「字幕から見る翻訳のツボ」という題で解説した。上映をはさんで教員と学生の質疑応答をおこない、アンケートに答えてもらった。「上映前に歴史的背景を知ることができて映画を何倍も楽しめた」「これからフラダンスのサークルに入るつもりなのでとても勉強になった」「福島方言は英語字幕にどう反映するのか」「いわき市は Iwaki City, Northeastern Japan, 夕張は Yubari と訳されていた。字幕翻訳で地名はどうあつかうのか」「英語字幕付きで邦画を観たことはなかったので刺激になった」といったコメントがあり、参加者数は少なかったが皆大満足だった。残り3回のラインアップは次の通りである。

- ・第2回(7月13日):『キャラメル』(フランス・レバノン合作、ナディーン・ラバキー監督・主演、2007年)。解説:菊地達也准教授(イスラム思想史)「レバノンという国、ベイルートという街」、「中東の女性たち」
- ・第3回(10月19日):『あの子を探して』(中国、張芸謀(チャン・イーモウ)監督、1999年)。解説:花澤聖子准教授(現代中国社会・文化研究)「『あの子を探して』の社会的・文化的背景」、植村麻紀子専任講師(中国語教育学)「中国語の音声と字幕について」
- ・第4回(11月9日):『WATARIDORI』(フランス、ジャック・ペラン

監督、2001 年）。解説：飯島明子専任講師（海洋生物学、生態学）
「WATARIDORI をより理解するために－なぜ鳥は渡るのか」

いずれの回も学生たちは映画を観る楽しさに、教員の解説という学びが加ったことの効用を感じている。また、選択外国語で言語を学んでいてもその言語の映画を観るのは初めての学生がほとんどで、「今後はもっと観たい」「日本では触れることが少ない地域や、本学で学ぶ機会が少ない分野の作品を取り上げてほしい」「先生方の造詣の深さやユーモアのセンスに感心した」等の感想があった。課題としては、上映時間が長いため途中で退席してしまう学生が多いこと、クリスタルホールが明るすぎて画面の色が薄く、映像の魅力を十分に楽しめないことである。

4.3.3 MULC 講演会

MULC 主催の講演会も始めた。

第1回(6月22日)は西江雅之氏(文化人類学・言語学)が「食べられるものと食べ物－文化としての食べ物・コミュニケーションとしての食べ物」という題で講演した⁷⁾。「満員電車は食肉倉庫、衝撃的だった」「わたしたちは言葉を食べているという考え方は圧巻だった」「以前西江先生の『トライ・スワヒリ語』を受講。とても面白かったのでまたお話が聞けてうれしかった」「当たり前のことが実は複雑だということを知った」「文化によって自分がいかに縛られているのかわかった。」「『だれ』と『どこ』で『どのように』食べるかの方が食べ物本来の味よりも味を決めていることがわかった」等のコメントがあり、西江氏による食文化への本質的洞察を学生は真っ正面から受け止め、咀嚼していた。頼もしいことである。

7) 講演のおよその内容は西江(2010)、西江(2005)からも知ることができる。

第2回(11月5日)は黒田龍之助氏(フリーランス語学教師)が「外国語・危機一髪! ~学生、教師、そしてフリーへ」という題で講演した。黒田氏は以前本学でロシア語の非常勤講師を務めたことがある言語学者である⁸⁾。ロシア語教師を経て英語教師となり、現在は文筆活動に専念する波瀾万丈の半生をふりかえるお話だった。「就活を前にして語学しか特技が無いことに不安を感じていたが、自信が持てた」「外国語にかかわらず、目の前に現れたすべてのチャンスにチャレンジしていく姿勢をぜひ見習いたい」「改めて外国語学習を続けていて良かったと感じた」「先生の著書を読んだことがあるので非常に興味深かった」といった声が多く、外国語学部を卒業してこれからの時代を生きていく学生には大きな励ましとなったようだ。

4.3.4 「IL フェスタ」

10月2日に国際言語文化(IL)学科(インドネシア語・タイ語・ベトナム語・ブラジルポルトガル語)の受験生向けオープンキャンパスを広報部の主催で行った。マルクを会場の一部として使用し、4言語の料理とスイーツを提供し、踊りや楽器演奏などのパフォーマンスを行ない、大盛況だった。また、12月22日には国際言語文化学科とマルクの共催で「インドネシア・タイ・ベトナム年越しフェスタ 2010 -食べて! 歌って! 踊って!」を学内全学科生向けに開催した。4言語の教員とマルク事務局の奮闘により、こちらも大成功だった。

このように複数の言語が合同で、あるいは他部署との共催でイベントを開催できたことは2010年度の大きな成果である。初めての試みだったため、急に決めて急に開くことが多かった。来年度はより計画的かつ効率的な企

8) 本学が開講する「トライ・外国語科目」は黒田(2000)と上山(1991)から想を得たものである。藤田(2006, pp.525-528)参照。

画を心がけ、関係者の負担を減らしたい。

4.3.5 「MULC 通信」の発行

「MULC 通信」を2010年6月から月1回、8号まで発行した。A4一枚のこのミニコミ誌はマルク事務局が企画・編集のすべてを担当している。マルクに常駐する7つの言語の語学専任講師の子供時代をインタビューし、行事予定や推薦図書などとともに載せている。子供の頃、「家には電気も水道も電話もなかった」「大学に進学したのは村で自分一人だけだった」「ビー玉、虫取り、ゴム跳び、竹鉄砲でよく遊んだ」「グラウンドのいい所をとってよくドッジボールをした」「村でテレビがあるのは自分の家だけ。近所の人たちが集まって一緒に見た」「子供の頃から先生になりたかった」「夕食はいつも家族一緒に、仕事も町の中か、すぐ近くで見つけるのが普通だった」「19才のとき下放（かほう）に出た」等、短いながら、先生方の子供の頃の暮らしと歴史の流れを感じさせる読みごたえのある記事だった。

こうした努力の甲斐があつてか、マルクの利用者数は開館以来、順調に増えている。

5. 戦略的大学連携 GP とマルク

マルク開設の2008（平成20）年度から3年間、本学は千葉大学の主導のもと、敬愛大学、城西国際大学とともに、文部科学省の「戦略的大学連携支援事業」支援プログラム「ユニバーサルコミュニケーションのための教養教育に向けた千葉圏域コンソーシアム」に採択された⁹⁾。4 大学で役割分担し、

9) コンソーシアムについては <http://www.trial.ge.chiba-u.jp/> 参照

本学は外国語教育の幹事校となった。大学間の距離からして e-learning の導入は不可避となり、本学は授業管理支援ツールである moodle の普及、および、「トライ・外国語科目」に対応する初学者向けの多言語デジタルコンテンツ(語学面/文化面)の開発に取り組んだ。

5.1 moodle の普及と多言語デジタル・コンテンツの作成

英語、日本語と異なり、多言語についてはごく少数の例外を除いてデジタル的な観点はほとんど無かった。連携 GP は、本学の多言語教育に、「デジタル」という新しい観点を否応なしに植え付けたと言える。特任研究員が moodle 講習会を開き、教員は少しずつスキルを習得していった。現在は相当数の科目で moodle が使われている。

デジタル・コンテンツの作成には9つの言語が取り組んだ。当初はすべてに不慣れで苦しいものであった。だが、デジタル教材を自分の手で作る楽しさが徐々にわかってくると教員の意識も大きく変わる。自発的に作ったコンテンツには愛着が湧く。それを使った授業にも熱がこもる。そして、いまどきのデジタル世代の学生の反応はすこぶる良い。

新しい技術の習得は強制すべきことではないが、携わった教員にとって得がたい刺激となる。他の言語のコンテンツを互いに参照できるため、FD 効果もある。授業で使うだけでなく、学生が選択外国語やトライ外国語で何語を選ぶか決める際の参考にしたり、受験生向けの公開講座での活用など、さまざまな用途が考えられる。なお、本学のネットワーク環境はまだ十分とは言えず、今後補強されてしかるべきであろう。また、本学にはタイ語、ベトナム語、インドネシア語、ブラジル・ポルトガル語といった、日本では学ぶ機会が少ない言語の専攻がある。こうした言語のデジタルコンテンツは世界的に見て稀少であり、ある程度のストックができてくれば大きな可能性が開けるものと予想される。

5.2 多言語データベースの構築

マルクは教員のノウハウと補助金のおかげで、短期間に充実した教材ソフトを揃えることができた。今後はそうした教材を学生にどのように使わせていくかを考えていく必要がある。各言語の教材ソフトを、日本語と当該言語の両方で登録するデータベースを作り、いずれ学生への図書貸し出しを可能にしたい。その際、文字コードなど、多言語処理の問題が生じることが予想される。ITC の高度なスキルと知見をもち、マネジメント経験が豊かな教員が必要となる。筆者は補助金により 2010 年 3 月にフランス、ナンシー第 2 大学の Centre de Langues Yves Chalon を視察する機会をえた¹⁰⁾。同センターはヨーロッパでの外国語自律学習の草分け的存在である。Marie-José Gremmo 教授、Sam-Michel Cembalo 教授、Anne Chateau センター長にインタビューすることができた。彼らによれば、自律学習支援センターが十全に機能するためには語学教師だけでは足りず、ITC の高度な知識をもつ教師、そして、学生のどんな質問にも答えられる司書、の 3 つが必要だという。大変参考になった。

6. 最後に

マルクのような教育施設は、言語と組織の縦割りを越えて柔軟に活動しなければ真の力を発揮することはできない。多言語・多文化・多目的であることは自明であるが、教職員が予想もしなかった利用を目の当たりにすることがある。それを「多機能」と呼びたい。「付加価値」と言い替えてもよい。学年末にベトナム語の学生が何人もアオザイを着てマルクにやって来た。ファ

10) Centre de Langues Yves Chalon の教育実践はネット上に公開されている紀要 Mélanges CRAPEL の諸論文を通して知ることができる。

ッションショーでもしているのかと思い尋ねてみたところ、全員が4年生で、民族衣装を着た自前の卒業写真を、友達と一緒に、ベトナムエリアを背景に撮っているのだという。なるほど、言われてみれば、そうしたくなる気持はわかる。建築家の青木淳は、建築物の場としての質を、そこですることが決まっているような建築(遊園地)と、そこで行なわれることによって中身が作られていく建築(原っぱ)に分けている。マルクも教職員側の意図を越えて、利用者である学生が自由に使いまわす「原っぱ」のような「多言語・多文化・多目的・多機能型教育施設」になれたらと願っている¹¹⁾。

参考文献

<日本語文献>

- 青木淳(2004)『原っぱと遊園地』王国社
上山あゆみ(1991)『はじめての人の言語学』くろしお出版
黒田龍之助(2000)『外国語の水曜日』現代書館
酒井邦秀(2002)『快読100万語!ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫
堤 未果(2011)『社会の真実のみつけかた』岩波ジュニア新書
寺島実郎(2010)『世界を知る力』PHP 新書
西江雅之(2010)『食べる』青土社
西江雅之(2005)『「食」の課外授業』平凡社新書
藤田知子(2006)「外国語学部における外国語教育活性化の試みー「選択外国語科目」の4年間」『神田外語大学紀要』18号、pp.519-534.
水野邦太郎(監)(2010)『大学生になったら洋書を読もうー楽しみながら英語力アップ!』アルク

11) 本稿を執筆するにあたり、マルクを文字通り支えている語学専任講師の先生方と、職員の方々の献身的な仕事ぶりに、改めて、敬意と感謝を捧げたい。旧選択外国語科目運営小委員会、現在の多言語教育運営小委員会の歴代の委員の方々にも心からお礼申し上げる。

〈外国語文献〉

Gremmo, Marie-José (2009): Conseiller en langues: proposition d'analyse de deux décennies de théorie et de pratique(s) pour une approche comparée du tutorat en FOAD, in Rivens-Monpeau, A. et M.-J. Barbot(eds), Dispositifs médiatisés et accompagnement-tutorat, Collection UL3, Université Charles-de-Gaule-Lilles3, pp.173-190.

追記

本稿を脱稿後、東日本大震災が起こった。マルクの建物も被害を受けたが、迅速に補修・補強工事が行われ、新学期からこれまで通りの利用が可能となった。第1回の MULC 映画鑑賞会で取り上げた映画『フラガール』の舞台は福島県いわき市、本学の英語研修施設 **British Hills** も福島県に位置している。穏やかな日常が一日も早く回復できるよう祈るばかりである。